

【論 文】

アイヌの歌・踊りの伝承に関する一考察  
—札幌を拠点とするアイヌ古式舞踊の保存会を事例として—

呉 松 旆

要旨：本稿では、アイヌ古式舞踊の伝承に携わる「札幌ウポポ保存会」の会員の出身地／出自と伝承演目の由来を辿ることを通して、札幌を拠点とする同会の特徴を明らかにする。札幌在住のアイヌは現在、殆ど他地域の出身者またはその系譜を持つ者である。つまり、札幌におけるアイヌの人口構成は、「転住型」と位置づけることができる。筆者による 2020 年の調査時点では、会員は札幌生まれが最も多いが、父母または祖父母の世代まで遡ると、彼（女）らは北海道各地域に出自を持っていることがわかる。なかでも、自らや父母または祖父母の世代の出身地が平取をはじめとする日高管内にある場合が特に多い。同会は 1990 年代初頭に「アイヌ古式舞踊連合保存会」の構成団体として追加指定され、15 の基本的演目を確立した。それらの演目の中には、札幌出身者によって伝承されるものは見当たらず、新十津川をはじめとする石狩川流域に由来するものが最も多く、そのほか本別や穂別等に由来するものもある。つまり、同会会員の出身地／出自と 15 演目の伝承地とを比較した時、同会における地域的多様性が見出されるものの、会員の出身地／出自と演目の伝承地の間には必ずしも相応の関係があるとはいえない。要は、出身地／出自と演目という二つの側面で異なる地域的多様性が認められるわけで、筆者はこの二重性こそが札幌を拠点とする同会の特徴であると考ええる。

キーワード：アイヌ、札幌、アイヌ古式舞踊、保存会、転住型

1. はじめに

アイヌ古式舞踊<sup>1</sup>は、1984 年<sup>2</sup>から 2023 年現在まで国の重要無形民俗文化財に指定されており、2009 年にユネスコの「人類の無形文化遺産の代表的な一覧表」に掲載された。アイヌ古式舞踊に関する先行研究は、歌や踊りの記録に重点が置かれる傾向があり、戦後から多くの貴重な蓄積を残している。その中でも特に重要なのは、『アイヌ伝統音楽』(1965)や『北海道アイヌ古式舞踊』(1987)、『アイヌ古式舞踊調査報告書(I-III)』(1991-1993)である<sup>3</sup>。『アイヌ伝統音楽』は、現在までで最も広範な地域と多数の伝承者を網羅し、合計 1987 曲を収録したものである。そのうち、原型として重要な 440 曲に対して解説と収録地区が明記されている。同書の収録地区は、北海道の 22 市町村に及び、主に「宗谷、釧路、十勝、浦河、静内、胆振、長万部、石狩川流域、沙流川流域、鶴川流域」(日本放送協会 1965)に分けられる<sup>4</sup>。このうち、石狩川流域という地域的区分は、概して上川管内を中心に、空知管内の一部を含めた範囲とされ、札幌をはじめとする行政的地域区分としての石狩管内が含まれていない。

それに対して、後の『北海道アイヌ古式舞踊』と『アイヌ古式舞踊調査報告書(I-III)』は、国の重要無形民俗文化財指定に向けた動きのなかで、阿寒、旭川、浦河、帯広、札幌、様似、静内、白老、白糠、千歳、弟子屈、新冠、春採(釧路)、平取、門別、三石、鶴川という 17 市町を拠点とする保存会を主な対象として 17 地域に分けて、それぞれの会に伝承される歌や踊りを採譜し記録している。管見によれば、『アイヌ古式舞踊調査報告書(III)』(1993)は、これまでの先行研究の中で、初めて明確に札幌のアイヌ古式舞踊の伝承状況を取り上げた文献である。河野(2000)が論じたように、第二次世界大戦後における札幌のアイヌは、殆ど他の地域出身者あるいはその系譜を持つ者なので、大略的に「地元型」ではなく、「転住型」と位置づけることができる。1960 年代の調査に基づいた『アイヌ伝統音楽』の採録地域に札幌が含まれなかったのは、このような札幌におけるアイヌ人口構成の特徴によるものと考えられる。

札幌におけるアイヌ人口構成の「転住型」の特徴は、本稿の研究協力者である「札幌ウポポ保存会」（以下、「保存会」と略称）の会員の出身地／出自（出身地と出自の使い分けについては、第4章の冒頭部において詳述）にもよく反映されている。また、同会が伝承している歌や踊りにも同様の傾向が窺われる。「保存会」は、札幌に定住していたアイヌによって、1979年に札幌で結成された。2023年現在、同会を含め、北海道内17市町を拠点とする保存会<sup>5</sup>は、アイヌ古式舞踊の保護団体である「北海道アイヌ古式舞踊連合保存会」<sup>6</sup>の構成団体として指定されており、それぞれの地域で受け継がれるアイヌの歌や踊りの保存・伝承を目的として活動している（甲地 1995、2004；齋藤 2014；岩澤ほか 2019；木戸 2020）。「保存会」の公式小冊子によれば、同会は「石狩川筋に伝わるウポポ・リムセを伝承する」（札幌ウポポ保存会 発行年不明）のものであるという。そのほか、同会は、本別や穂別等出身の伝承者から歌や踊りを受け継いでいる。

以上のように、「保存会」が札幌以外の様々な地域の歌や踊りを取り入れ、伝承していることは明らかであり、その地域的多様性は、殆ど同会会員の出身地／出自の多様性に包摂され得るものである。しかしながら、これらの歌や踊りは、必ずしも会員が自らの出身地で覚えたものを会員間で伝承したわけではないし、全ての会員が自らの出身地に伝承される歌や踊りを身につけているとも限らない。自らの出身地に伝承される歌や踊りに触れたとしても、余興程度の習熟度に留まる場合が少なくないほか、同会に参加してから初めてアイヌの歌や踊りについて習ったという会員や、札幌に移住する前に、自らの出身地とは異なる地域でアイヌの歌や踊りを習得していたという会員もいるからである。つまり、「保存会」の会員のアイヌの歌や踊りに関する経験は極めて多彩であり、個人によって異なるものであることがわかる。

本稿は、アイヌ古式舞踊について、伝承の担い手の出身地／出自構成と演目の地域的な由来との関わりという従来さほど検証されてこなかった視点から考察することを目的とする。そのために、札幌におけるアイヌ人口構成の変遷と「保存会」の結成及び発展経緯を確認したうえで、同会会員の出身地等を辿りながら、このような多様な出身地／出自を持つアイヌによって構成された「保存会」が伝承してきた歌や踊りが、具体的にはどの地域出身の伝承者から受け継がれたものなのか、あるいは、どのような地域の特徴を具えているのかを明らかにする。さらに、『アイヌ伝統音楽』や『アイヌ古式舞踊調査報告書(III)』といった文献資料の分析と「保存会」会員への聞き取り調査を通して、北海道最大の都市である札幌在住のアイヌによる歌や踊りの伝承の側面を描くことを試みる<sup>7</sup>。

## 2. 札幌におけるアイヌ人口構成の変遷

本稿の調査研究に協力してくれたのは、「保存会」に参加している／していたアイヌ古式舞踊の担い手たちで、いずれも札幌市内に居住している／していた。「保存会」を理解するために、まず同会が拠点とする札幌の地域的な特徴を確認しておかなければならない。

北海道はサハリンの南、カムチャツカ半島から連なる千島列島の南西、本州の北の海域に位置する面積7万7984km<sup>2</sup>の島（日本領土総面積の5分の1強）であり、本州に次ぐ日本で二番目に大きな島である。現在、北海道は日本国の領土の一部であるが、江戸時代末期以来、北海道は対ロシアの軍事拠点として注目され、明治維新の後で日本に最初に編入された「植民地」（小熊 1998:56；上村 2001:81；多原 2006:18）ともいえる。だが、「先住民族(indigenous peoples)」という概念で捉えるならば、北海道は日本という国民国家が形成される以前から、アイヌが自律的に暮らしてきた領域である。

北海道石狩平野の南西部に位置する札幌も、その名の語源はアイヌ語である。山田(2000)が指摘するように道内の多くの地名の例に洩れず、札幌の意味についても様々な説が出されてきたが、地名

一般の名付け方から見ると、「サツ・ポロ・ペツ(乾く・大きい・川)」(山田 2002:17)と理解するのが自然であるように思われる。その札幌市は 1972 年に、日本最北の政令指定都市となった。2023 年現在、人口 197 万 1225 人<sup>8</sup>を擁する札幌市は、北海道全体の人口 514 万 388 人<sup>9</sup>の約 38%を占める北海道のプライメイトシティであり、北海道庁及び石狩振興局の所在地でもある。公益社団法人北海道アイヌ協会や、公益財団法人アイヌ民族文化財団も現在、事務所を札幌市に設置している。ここで、札幌市におけるアイヌの人口数の変化を概観してみよう<sup>10</sup>。特に留意すべきは、従来のアイヌ人口に関する考察は、あくまでも「可視化できるアイヌ」を対象としているという点である。これは、各時期において人口調査に現れることのないアイヌが数多く存在するためである(石原 2017;岩佐 2018)。これらのことを承知したうえで、限られた資料をもとに整理していこう。

1780 年代後半には西蝦夷地のイシカリ十三場所<sup>11</sup>が定着しつつあったが、現在の札幌市は、そのうちの五ヶ所<sup>12</sup>の範囲に相当する(平凡社地方資料センター 2003:680)。1807 年時点で、前者のイシカリ十三場所のアイヌ人口は合計 2285 人、後者の五ヶ所は合計 493 人であったと記録されている(加藤 1991:100)。ところが、イシカリ十三場所に暮らしていたアイヌは、1807 年以降、減少傾向が顕著になる(加藤 1991:100)。また、開拓使が設置された 1869 年になると、札幌郡全体のアイヌ人口はわずか 5 戸 13 人しかなかった(札幌市教育委員会 1991:538)。その理由として、苛酷な労働や疫病により多くのアイヌが死亡したこと、豊平川の流れが変わって鮭が少なくなったり、場所を支配する知行主が一つにまとまったりするなかで、アイヌの居住地が何度も変更されたことが挙げられる(平山 2016:72-73;新藤 2018:30)。谷本(2018)によれば、開拓使が函館から札幌に移って以降、札幌の都市化の進展が進んだことで、札幌市にあたる地域で明治時代以前に形成されていたアイヌ集団は、石狩川本流の方へ、次いで上流の旭川近文へと移動することになったという。例えば、「保存会」の祖である A 氏(1884-1982)の両親は、こうした都市の発展を背景にして、札幌から新十津川に移住している(石井 1982:40)。長い間、札幌にはアイヌがいなかったといわれてきたのは、このような時代の変遷と無関係ではないだろう。

河野(2000)が論じたように、第二次世界大戦後における札幌市内のアイヌは、殆ど他の地域出身者あるいはその系譜を持つ者であり、大略的に「転住型」と位置づけることができる。特に高度経済成長期以降は、全道各地の炭鉱・農漁村から都市部へと人々が就学・就職の機会を求めて集中し、各地のアイヌも生活手段を求めて札幌をはじめとする都市部へと移動するようになった(札幌市教育委員会編 2002:736)。結果的に、現在の札幌市はアイヌの人々が最も多く集まる地域の一つとなったのである(小内 2012:10)。以上のようなアイヌ人口の転住型の特徴が、札幌市における「保存会」の結成や発展経緯の重要な背景となっていると考えられる。

### 3. 「保存会」の結成及び発展経緯

「保存会」の結成及び発展経緯は、社団法人北海道ウタリ協会札幌支部(以下、札幌支部と略称)の成立と深く関わっている。札幌支部は、1971 年に「社団法人北海道ウタリ協会石狩支部」という名称で、現在の札幌市を含む石狩管内に居住するアイヌによって設立された。1972 年に、拠点を札幌に移したことを機に、「社団法人北海道ウタリ協会札幌支部」と改称された(社団法人北海道ウタリ協会札幌支部 2003:4)。その後、2014 年に、組織変更に伴い、現在の名称、すなわち「札幌アイヌ協会」に変更した。

札幌支部の会員たちは、1972 年から 1978 年までの間に 7 年連続でシャクシャイン法要祭(静内町/現・新ひだか町)とまりも祭り(阿寒町/現・釧路市)に参加していた。これらの祭りは、全道のアイヌの人々が集まる二大行事であり、そこで、札幌支部の会員たちは年寄りの歌や踊りに触れた。彼(女)らはそれに懐かしさを感じていて、この経験を機に、「民族として復活したい」というアイヌとしての願望が心

の中に芽生えたという(元会員 B 氏、穂別出身、70 代、男、2020.8.17 聞き取り:以下、聞き取り日は年月日のみを記す;初代役員 C 氏、三石出身、80 代、女、2020.9.16)。

1974 年頃に、札幌支部が生活館建設運動を始めた背景には、前述した二つの祭りへの参加が触発した側面もあると思われる。生活館は、札幌支部の創立から 7 年後の 1978 年に整備され、後に札幌支部の生活相談員が常駐する施設となり、アイヌに関する各種の活動や会議等のために利用されている。つまり、生活館の整備によって、札幌在住のアイヌが集まることのできる一つの空間が作られたのである。また、このような生活館の整備をきっかけに、アイヌの女性たちが札幌支部に入会し、会員たちは生活館という空間を利用して集まり始めた。生活館という空間は、最初は気軽な集会の場であったが、後にアイヌの歌や踊りをみんなで一緒に練習する場にもなった。

以上のことを背景に、札幌支部の会員たちは、1979 年に新十津川出身の A 氏というアイヌのフチ(媼)を囲んで、札幌支部の活動の一環として、アイヌの歌や踊りの復興を開始した(B 氏 2020.8.17;元会員 D 氏、穂別出身、60 代、女、2020.8.20;C 氏 2020.9.16)。彼(女)らは 1980 年に「ウポポ・リムセ学習会」と名乗るようになった。これは主に当時の札幌在住のアイヌの集いの場として機能し、専ら歌や踊りの練習をしていた。C 氏(2020.9.16)によると、当時は自分も含めた会員がアイヌの歌や踊りに親近感を覚えながらも、それらに習熟していないという状態の中、A 氏自身のアイヌとしての経験談を聞いたりアイヌの歌や踊り教わったりするという形で、アイヌの文化を伝承してきたのだという。

1984 年頃になると、「ウポポ・リムセ学習会」は「ウポポの会」へと改称された。リムセ(*rimse*)とは、アイヌ語研究では沙流・千歳地方を除く北海道内各地で主に「踊り」もしくは「踊る」を指す語と理解される(服部 1964:178;中川 1995;田村 1996:580;萱野 2002:468;井筒 2003:157;平山 2013:186)。一方、『アイヌ伝統音楽』(1965)によると、アイヌ語のウポポ(*upopo*)とリムセは座り歌と踊り歌を意味する。座り歌とは、何人かが行器の蓋を中心に丸く輪になって座り、その蓋を手のひらで軽く叩き拍子をとりながら輪唱して歌うものである。それに対して、踊り歌は多くは斉唱で歌われ、曲に合わせて踊りがつけられるもので、両者は現在、アイヌ文化伝承活動のひとつの核になっている(中川 2009:323)。座り歌、踊り歌ともに、現状では女性が歌い手である場合が多い。知里真志保(1955)が整理したように、座り歌と踊り歌を指すアイヌ語には地域によって差異が見られ、両者を区別しない地域もある。とはいえ、より汎用性が高いのはウポポであるといえる。

表 1 座り歌と踊り歌のアイヌ語(知里(1955:58)に基づいて作成)

	樺太	北海道北半	北海道南半(日高沙流)	北海道南半(胆振)
座り歌	<i>hechiri</i>	<i>upopo</i>	<i>upopo</i>	<i>upopo</i>
踊り歌	<i>hechiri</i>	<i>upopo</i>	<i>horippa</i>	<i>rimse</i>

2020 年の調査時点において、ウポポは座り歌であり、リムセは踊り歌であるという理解が「保存会」の会員の間で共有されていた。さらに、そのような理解からそれぞれ「歌」と「踊り」に特化した解釈も聞かれた。例えば C 氏(2020.11.8)によると、多様な地域出身の会員たちにとって最も「感じる」言葉がウポポだったので、「ウポポ・リムセ学習会」改称の際にウポポを残して「ウポポの会」としたのだという。

1984 年、アイヌ古式舞踊が国の重要無形民俗文化財に指定されるのに伴い、阿寒、旭川、浦河、帯広、静内、白老、春採(釧路)、平取を拠点とする 8 団体が、保護団体である「北海道アイヌ古式舞踊連合保存会」の構成団体として指定された。こうした動向を受け、同会は、1991 年に札幌という地名を冠し、保存会という名を乗って現在の会名へと改称した。B 氏(2020.9.18)によれば、1991 年に「ウポポの会」から札幌を冠する現在の会名に改称したのは、同会も保護団体を構成する団体として積極的に認められ

ようとしたためであったという。このような「保存会」は、やがて 1994 年に様似、白糠、千歳、弟子屈、新冠、門別、鶴川、三石の 8 地域の保存会とともに「北海道アイヌ古式舞踊連合保存会」の構成団体として追加指定されるに至ったのである。

#### 4. 「保存会」会員の出身地／出自

前章で確認したように、「保存会」の会員は、最初から基本的に札幌アイヌ協会の会員であった。現在になっても同様の状況が続いている。また、1979 年から 2023 年現在にかけて、女性会員が圧倒的に多く、同会の運営に中心的に携っている。初代会員たちは、主に戦後 1950 年代から 1960 年代にかけて道内各地から札幌に来た人たちであった。

ここで、「保存会」の会員の出身地<sup>13</sup>について確認してみよう。1979 年から現在までに「保存会」に所属したすべての会員の情報を網羅することは難しいが、1990 年代に出された同会の記念誌や 2000 年以降の会員名簿などの既存資料の記載内容に基づき、会員に尋ねたことを資料と照らし合わせる作業を試みた。本稿では、会員自身の出身地のほか、特に札幌生まれの第二世代と第三世代の会員については、同会に在籍している／いた彼(女)らの父母または祖父母の世代の出身地も視野に入れて考察を行うため、以下、会員が生まれた地域を「出身地」と称し、彼(女)らの父母もしくは祖父母の世代の会員の出身地を「出自」と称することにする<sup>14</sup>。

##### 4-1. 1979 年から 1990 年代にかけての会員の出身地

まず、1979 年から 1990 年代にかけて、「保存会」の会員の出身地は、その殆どが札幌以外であり、日高管内が大多数を占めていた。以下では、1979 年度、1984 年度、1991 年度の会員名簿を例として取り上げ、会員の出身地をまとめていく。

C 氏(2020.9.16)によると、1979 年の結成当初は 90 代の A 氏に加えて、7 名のアイヌの女性がいた。A 氏は新十津川出身で、1960 年代半ばに札幌へ移住した。その他の 6 名の出身地は、平取 2 名、三石 2 名、旭川 1 名、本別 1 名であり、いずれも 1950 年代から 1960 年代にかけての時期に 20 代前後の年齢で札幌市に移ってきた。そのため、1979 年度(表 2)の段階において、30 代が 3 名、40 代が 3 名であった。この時点でも、平取をはじめ、日高管内の出身者が計 4 名と最も多かった。続いて、1984 年度(表 3)の 7 名の会員の出身地を見ると、鶴川 1 名、平取 2 名、三石 2 名、旭川 1 名、本別 1 名であり、

表 2 1979 年度会員の出身地一覧 (筆者作成)

年齢別	性別	出身地別				
		旭川	新十津川	本別	平取	三石
		上川	空知	十勝	日高	
90代	女性		1			
	男性					
40代	女性			1	2	
	男性					
30代	女性	1				2
	男性					
管内別合計		1	1	1	4	

表 3 1984 年度会員出身地一覧 (筆者作成)

年齢別	性別	出身地別					
		鶴川	旭川	新十津川	本別	平取	三石
		胆振	上川	空知	十勝	日高	
90代	女性			(-1)			
	男性						
50代	女性				1	2	
	男性						
40代	女性	1(+1)	1			1	
	男性						
30代	女性					1	
	男性						
管内別合計		1	1	0	1	4	

※人数の横に示したカッコ内の数字は、表 2 と比べる場合、会員の増減を意味する。

1979年度と同様に日高管内の出身者が最も多いことが見てとれる。

1980年代半ばに入ると、会員は次第に増加傾向を見せる。1991年度(表4)には、同会創設時の会員4名を含め、合計16名が在籍していた。出身地の内訳は、札幌1名、白老1名、穂別1名、鶴川1名、静内2名、平取4名、三石2名、旭川2名、十勝管内2名(詳細な出身地不明)であった。この時期になっても依然として日高管内の出身者が最も多く、合計8名であった。1991年度以降、婚姻や養子縁組によりアイヌと家族関係を持つ和人<sup>15</sup>も「保存会」に参加し始め、会員としてアイヌの文化を伝承し、さまざまな場でアイヌの歌や踊りを披露するようになった。こうした会員の出身地は、概してアイヌの人口比が比較的高い地域に集中する傾向にあるが、アイヌ人口が比較的多いとされる白老の出身者は非常に少ない。先に確認したとおり、1991年度に在籍した白老出身の会員は1名しかいなかったことからそれは明らかである。

表4 1991年度会員出身地(筆者作成)

年齢別	性別	出身地別								
		*婚姻や養子縁組によってアイヌと家族関係を持つ和人								
		札幌	白老	穂別	鶴川	旭川	(不明)	静内	平取	三石
		石狩	胆振		上川	十勝	日高			
60代	女性						*1(+1)		1	
	男性									
50代	女性	1(+1)	1(+1)	1(+1)		1(+1)	1(+1)	1(+1)	2(+1)	1
	男性									
40代	女性				(-1)	1(+1) (-1)		1(+1)	*1 (+1)	1
	男性									
30代	女性				1(+1)					
	男性									
管内別合計		1	3		2	2	8			

※人数の横に示したカッコ内の数字は、表3と比べる場合、会員の増減を意味する。

#### 4-2. 2000年代以降の会員の出身地／出自

続いて、2000年代以降の会員状況についても概観していこう。ここからは、専ら聞き取り情報をもとにしているので、表を付すことなく文章のみによる記述を進めていく。

2005年前後より、特に女性会員が子どもを連れて参加することや、第二世代の会員が自主的に入会することが多くなったという。それゆえ、「保存会」は会員数が増加するとともに、札幌の出身者の割合も顕著に上昇した。こうした特徴は現在も続いている。

まず、2005年度の会員の在籍状況を確認してみよう。2005年度には、初期会員2名をはじめ、合計35名が在籍していた。管内別に見れば、日高管内の出身者は合計13名で、依然として最も多くを占めている。一方、市町村別に見ると、札幌の出身者が7名と最も多い。そのうち20代の2名、10代の3名の第二世代の会員について、同会に在籍している父母の世代、すなわち第一世代の会員の出身地を遡ると、鶴川1名、白糠2名、平取2名であった。

次に、2020年度の会員の在籍状況を見てみよう。この時点では、56名の会員が在籍していた<sup>16</sup>。そのうち、女性は44名、男性は12名であり、平均年齢は48歳である。年代別の内訳は、80代1名、70代10名、60代6名、50代7名、40代5名、30代6名、20代4名、10代6名、10歳未満11名であり、50代から70代の女性が半数近くを占めるが、20代、30代の女性会員に連れられて参加する未成年の会員も少なくない。また、10歳未満の会員を除くと女性が合計38名と大多数を占めている。全体的に

見れば札幌で生まれた者が最も多いが、年齢が高くなるほど、札幌の出身者の数は減っていく傾向にある。例えば 60 代以上の会員のうち札幌生まれは 1 人しかいないが、同会員は出自も札幌であり、祖父母の世代から継続して札幌に住んでいるという。一方、50 代以下の会員には、札幌出身者が多い傾向が見られる。そのうち、20 代から 50 代の札幌出身者の場合、父母の世代に遡ると、全員が札幌以外の北海道内の各地域の出自を持っている。また、10 代以下の会員の場合は全員が第二世代もしくは第三世代の会員であり、父母の世代または祖父母の世代まで遡ると、札幌以外の北海道内各地域に出自を持つことがわかる。管内別に見ると、札幌生まれの 50 代以下の会員は、平取をはじめとする日高管内にその出自を遡ることができるものが最も多い。次いで多いのは、旭川をはじめとする上川管内と鶴川をはじめとする胆振管内である。

2020 年の調査時点で、「保存会」の会員は、基本的には「札幌アイヌ協会」の会員もしくは家族会員であり、全員が札幌市に居住者である。このことは、1979 年に北海道ウタリ協会札幌支部の女性会員によって「保存会」が結成されてから現在まで続いている。「保存会」の会員は、「札幌アイヌ協会」に入会してから「保存会」に入会する、というプロセスが一般的だからである。「札幌アイヌ協会」は「保存会」の母団体であるため、前述したような札幌のアイヌ人口に見られる転住型の特徴は「札幌アイヌ協会」だけでなく、「保存会」の会員構成にもよく反映されていると考えてよいだろう。1979 年から 2020 年に至るまでの「保存会」の会員の出身地／出自を見ると、ある特定の地域に限定されることはなく、北海道内の様々な地域から札幌にやって来ていることがわかる。2005 年前後より、札幌生まれの 20 代以下の第二世代・第三世代の会員が増加しているが、彼(女)らの父母・祖父母世代の出自を見ると、それもやはり転住型の人口構成を反映していると理解できる。これらからは、今後は札幌出身のアイヌが増えていくことが予想できるだろう。

#### 4-3. 「保存会」会員の出身地／出自に見られる特徴

以上の考察からは、札幌を拠点とする「保存会」の歴代会員は、北海道内各地の多様な地域に出身地／出自を持っていることが確認できた。このような出身地／出自の多様性は、「保存会」が 1979 年に結成されてから一貫した顕著な特徴であるといえる。また、会員自身の出身地、もしくは父母・祖父母の世代の出自については、平取をはじめとする日高管内が最も多くを占めていることも結成当時から殆ど変わっていないことも特筆すべき点である。このように、会員の出身地は、時代が下るのに従い札幌に集中する傾向にあるが、出自という側面から見ると、地域的な多様性が依然として保たれていることがわかる。このような会員の出身地／出自における地域的な多様性が、「保存会」の大きな特徴の一つである。

一方、同会が伝承する多様な基本的演目は、日高管内で生まれた伝承者から教わるものばかりであるとは限らない。そもそも「保存会」に伝承される演目は、必ずしも会員自身が持ち込んできたわけではなく、全ての会員が出身地／出自を持つ地域の歌や踊りを伝承しているわけではない。このような状況の中で、会員たちは「保存会」に参加し、意識的に同会会員をはじめとする伝承者から様々な地域の歌や踊りを習うのである。そして結果的に、同会は他の保存会と同様、自らの方法でアイヌの歌や踊りを伝承し続けている。また、このような「保存会」の伝承活動は、主体的・能動的に自らの文化を振興するアイヌの一樣相として捉えられる。それでは、多様な出身地／出自を持つ「保存会」の会員たちは一体、どこの地域に由来を持つ歌や踊りの演目を伝承しているのだろうか。次の章では、「保存会」に伝承される演目について検証し、演目における地域的な多様性を確認した上で、それと会員の出身地／出自に見られる地域的な多様性との関わりについて検討する。

## 5. 「保存会」に伝承される演目の地域的由来

アイヌの歌や踊りの伝承活動の一環として、「保存会」は積極的にアイヌに関連する各種行事に参加し、歌や踊りを披露している。1989年から毎年開催されている北海道ウタリ協会主催の「アイヌ民族文化祭」や、1997年に施行された「アイヌ文化振興法」<sup>17</sup>に根拠をおく公益財団法人アイヌ文化振興・研究推進機構(現公益財団法人アイヌ民族文化財団の前身)が主催する「アイヌ文化フェスティバル」をはじめとし、全国各地でアイヌ古式舞踊が披露される機会が増えている(齋藤 2014: 15)。それらの公演などを契機として、「保存会」の活動もより一層活発になってきた(会員 E 氏、鶴川出身、70代、女、2020.12.12; 元会員 F 氏、豊浦出身、80代、女、2019.8.30)。

「保存会」は、札幌で集めた札幌支部の会員に先祖や先輩から受け継がれてきたアイヌの踊りや歌を伝承することを目指して、「アイヌ古式舞踊連合保存会」の構成団体として追加指定されるよりも前から普段の練習を通じて、15に及ぶ基本的演目を自ら確立してきた。これら15の演目は、初代会員の A 氏によって伝承されたものを中心とするが、会員の親戚または地元の古老によって伝承されてきたものもある。会員たちは、例会での練習や国内外での披露などを通じて、アイヌ古式舞踊の伝承活動を行っている。普段の練習は、主に札幌市共同利用館(旧生活館)とサッポロピリカコタン(アイヌ文化交流センター)、中央区民センターという三つの場所における例会で行う。公演などの都合にあわせて多少異なるが、踊りの練習は基本的には月に数回程度である(役員 G 氏、札幌出身、50代、女)。

### 5-1. 「保存会」で伝承される演目の種類

筆者は、同会で伝承される演目の由来やその伝承者について、主に C 氏や役員 H 氏(穂別出身、70代、女)、役員 I 氏(平取出身、70代、女)から聞き取り調査を実施した。その後、聞き取りからわかった内容を、『アイヌ伝統音楽』と『アイヌ古式舞踊調査報告書(III)』の記載と比較しながら考察を行った。その結果、同会は少なくとも下記の28演目を伝承してきたことがわかった。それらの演目は、「保存会」に取り入れられた時期により、概ね以下のように分類することができる<sup>18</sup>。

- (1) 1990年代に札幌におけるアイヌの歌や踊りが国の重要無形民俗文化財として指定される過程の中で、同会が自ら選択して北海道教育委員会(1993)に記録させたものであり、現在でも同会の基本的演目であると認められるもの<sup>19</sup>。
  - ①スチョイチョイ、②ハンロー、③フチトト、④ポンチカップ、⑤ヤイサマネナ<sup>120</sup>、⑥サボタッカ  
リキーキー、⑦ヤイサマネナ 2、⑧アラーハーオ、⑨アシペパルン、⑩アプカトパ、⑪ヘルトント  
ト、⑫カネレンレン、⑬ホロロッカ、⑭ペェシペェシタ、⑮リウカウポボ
- (2) 1990年代から2000年代までの間に同会が採用したもの。
  - ⑯アトイソーター、⑰トソロバ、⑱タラパハウオー、⑲チュカワカムイラン、⑳チュブキヘタン  
ネー
- (3) 2000年頃以降、同会が新しく取り入れた代表的なもの。その種類は現在も増加中である。
  - ㉑ホイヤオーホ、㉒チロヌップリムセ、㉓ピリカオッカイツンメノコ、㉔ク・リムセ、㉕イフンケ、㉖ウ  
エカブ、㉗サランペニ(イー)、㉘エムシリムセ

上記の①から㉘は、⑭、⑲、㉓、㉖を除けば、概して『アイヌ伝統音楽』において、採録地域や楽譜、ローマ字の歌詞、解説等が記録されている。なお、⑤と⑦には、『アイヌ伝統音楽』「抒情歌」に収録された yaysamanena、yaysama、yaysamane<sup>21</sup>と類似した歌詞が見られる。しかし、それぞれの楽譜から見ても、

⑤、⑦に舞踊の要素が顕著に含まれる点から見ても、『アイヌ伝統音楽』に収録された上記の曲と⑤、⑦との間には違いが認められる。したがって、表5では、⑤、⑦の採録地区について「見当たらない」と記している。また、後述となるが、各演目のそれぞれの伝承者および伝承者の出身地についても、同表に記載した。

表5 保存会の基本的演目一覧（筆者作成）

演目名	『アイヌ伝統音楽』における採録地区	伝承者名 (匿名)	伝承者の 出身地
① スッチョチョイ	道東から道央に広く歌い踊られている（日本放送協 1965 : 341）。	J氏	旭川
② ハンロー	石狩川流域地区・旭川（日本放送協会 1965 : 341）。	A氏	新十津川
③ フチトノト	釧路地区・美幌。伝承者は石狩川流域旭川近文出身の人である（日本放送協会 1965 : 362）。	A氏	新十津川
④ ポンチカップ	浦河地区・三石；胆振地区・白老；長万部地区・長万部；釧路地区・阿寒と釧路、白糠、釧路、塘路；沙流川流域地区・平取と門別；静内地区・静内と新冠；十勝地区・本別；鶴川流域地区・穂別と鶴川。全道各地にある歌であるが、地方によって呼び名も踊り方も色々に違っている（日本放送協会 1965 : 233）。	K氏	本別
⑤ ヤイサマネナ <sup>1)</sup>	見当たらない。	L氏	静内
⑥ サボタッカリキーキー	浦河地区・三石；釧路地区；沙流川流域地区；静内地区・静内；鶴川流域地区（日本放送協会 1965 : 379-381）。	M氏	穂別
⑦ ヤイサマネナ <sup>2)</sup>	見当たらない。	O氏	平取
⑧ アーラ ハーオ	石狩川流域地区・新十津川（日本放送協会 1965 : 225）。	A氏	新十津川
⑨ アシペパルン	石狩川流域地区・旭川。空知川筋から伝えられたものと思われる（日本放送協会 1965 : 35）。	A氏	新十津川
⑩ アブカトパ	石狩川流域地区・旭川と新十津川；胆振地区・白老と幌別；鶴川地区・鶴川；沙流川流域地区・平取と門別；静内地区・新冠；十勝地区・芽室太；釧路地区・白糠。その分布は殆ど全道的と見てよい（日本放送協会 1965 : 30-32）	A氏	新十津川
⑪ ヘルントント	長万部地区・長万部；胆振地方・虻田と白老；石狩川流域地区・旭川、鶴川流域地区・千歳；沙流川流域地区・門別、十勝地区・伏古と本別、幕別、芽室太；釧路地区・釧路と美幌、標茶。全道的に広く歌われているものであるが、地方によって歌詞が違うし、歌い出すところも一定していない（日本放送協会 1965 : 107）。	P氏	浦河
⑫ カネレンレン	石狩川流域地区・旭川（日本放送協会 1965 : 181）。	J氏	旭川
⑬ ホロロッカ	鶴川流域地区・千歳（日本放送協会 1965 : 87）。	A氏	新十津川
⑭ ペェシペェシタ	見当たらない。	A氏	新十津川
⑮ リッカウポポ	胆振地区・白老；釧路地区・標茶と美幌；沙流川流域地区・門別；静内地区・静内と新冠；十勝地区・芽室太、鶴川流域地区・穂別。（日本放送協会 1965 : 112）	K氏	本別

## 5-2. 基本的演目の地域的由来と伝承者の関係性

「保存会」は、1990年代初期に①から⑮を基本的演目として確立して以来、30年近くにわたって各地域の保存会や伝承者と交流しながら、例えば上掲の(2)や(3)の演目を習得することによって新たな演目として様々な場で披露している。以下では、代表的な演目例として①から⑮を重点的に分析する。『アイヌ伝統音楽』によれば、①から⑮(⑤、⑦、⑭を除く)は表5に示したとおり、それぞれ札幌以外の地域で採録されたことがわかる。

1960年代の『アイヌ伝統音楽』の調査時点において、①から⑮(⑭を除く)は北海道内に広く分布して

いた。その中で、例えば、④、⑩、⑪等は「全道的に」見られるものであるが、②等のように、特定の地域しか見られないものもある。いずれせよ、1960年代時点で札幌は調査地として設定されていないから、①から⑮(⑭を除く)は札幌では当然記録されていない<sup>22</sup>。

『アイヌ古式舞踊調査報告書(Ⅲ)』の刊行は、『アイヌ伝統音楽』が出版されてから30年後のことであった。当時は、各地域の保存会がアイヌ古式舞踊の伝承のために、様々な行事や活動に積極的に取り組んでいた。そのため、『アイヌ古式舞踊調査報告書(Ⅲ)』においては、アイヌ古式舞踊の調査も、各地域の保存会を中心として行われたと考えられる。そのうち、「札幌地区伝承演目」の章では、演目名や舞踊譜、実演の写真、演目の歌い方や踊り方に関する説明、歌詞のローマ字とカタカナ表記等が記載されている。とりわけ、それぞれの演目に伝承者の氏名が明記されている点は特徴的である。というのは、管見の限り、『北海道アイヌ古式舞踊』を含め、『アイヌ古式舞踊調査報告書(I-Ⅲ)』で取り上げられた17の保存会の演目の記録には、札幌を除き、伝承者の氏名が記されていないからである。これは1990年代の時点で、「保存会」の会員が自らの会に伝承されてきた各演目について「誰それさんから習った」という意識を持っており、その意識が他の地域に比べて強かったことを示しており、これも同会の特徴の一つといえるかもしれない。実際、会員への聞き取り調査からは、同会に伝承される演目の多くは、同会の結成を通して札幌という地域に受け継がれたというよりも、特定の個人から同会の会員へと受け継がれたという意識が強いことが窺える。

このほか、『アイヌ古式舞踊調査報告書(Ⅲ)』には、伝承者の氏名の前に、地名が記されている。しかし、この地名に関する詳細な説明が見当たらない。そこで、筆者は、同会の会員への聞き取り調査を通して、それらの地名について確認することにした。それによると、新十津川出身のA氏を除けば、伝承者の氏名の前に付け加えられた地名は、同伝承者の出身地として提示されたものであると考えられる。唯一の例外であったA氏の氏名の前に記されたのは、彼女の出身地ではなく、生前の最後の居住地であったという。

表5の①から⑮の伝承者の出身地の欄を、採録地域の欄と比較してみると、③、⑤、⑦、⑪、⑬、⑭は、伝承者の出身地と採録地域とに食い違いがある。このうち⑪は「全道的に広く歌われているもの」と思われる。また、③については、『アイヌ伝統音楽』の中で採録地区のほかにも、伝承者の出身地と育ちについての情報も提示されており、その地域は、同会の伝承者の出身地と一致することがわかる。

そのほかの9演目の伝承者それぞれの出身地は、『アイヌ伝統音楽』の採録地区に包摂されている。つまり、1960年代にある地区で採録された演目は、その地区に含まれる地域の出身者によって伝承されていたと想定してよいものと思われる。そう考えれば、1960年代に『アイヌ伝統音楽』で示された採録地区による演目の分類は、現在でも意味を持つものであることがわかる。断っておきたいのは、ここでは、演目の発祥地を遡ろうとする試みを通して、「保存会」に伝承される演目を本質的に捉えようとするつもりはないということである。あくまでも札幌を拠点とする同会に伝承される演目の由来に地域的多样性が見られることを確認することを目的としている。

ともかくにも、歌や踊りが伝承者と共に移動するという観点から考えれば、①から⑮の演目の動きは、札幌におけるアイヌ人口の特徴と類似している。つまり、札幌以外のところから札幌へと移ってきて、札幌で定着してきたという点が両者に共通する。

さらに、①から⑮の演目は、1960年代の『アイヌ伝統音楽』に記された伝承者が後に「保存会」の会員になったか否かに基づき、大きく二つの系統に分けることができる。一つは、会員自身によって同会へと伝承された9演目である。もう一つは、非会員によって伝承されていたものの、後に会員が習得した6演目である。前者には、新十津川出身の初代会員 A 氏から直接に受け継がれた演目②、③、⑧、⑨、

⑩、⑬、⑭と、旭川出身の初代会員J氏から受け継がれた演目①、⑫が該当する。後者には、④、⑤、⑥、⑦、⑪、⑮が該当し、第一世代の会員の親族や当会員の出身地またはその近くに住む古老によって伝承されていたものである。C氏(2020.9.16)によると、これら6演目はいずれも、それぞれの伝承者が1980年代になって札幌を訪れた際に、「保存会」会員へと伝えられたものであるという。表5からわかるとおり、これら15の基本的演目は、⑤、⑦を除き、それぞれ新十津川、浦河、本別、穂別、旭川という広範な地域の出身者によって伝承されており、同会に受け継がれてきた演目の地域的由来が多様性に富むことは明らかである。

しかしながら、このような演目の地域的多様性を、会員の出身地／出自に見られる多様性とは同一視できないという点が重要である。先にも述べたように、後者の6演目、すなわち基本的演目のうち約4割の各伝承者は、「保存会」の会員と地縁の関係や親族関係を持っているものの、同会の会員ではないからである。つまり、同会に伝承されてきた演目に見られる地域的多様性のかなりの部分は、多様な地域で歌や踊りを伝承していた会員自身が札幌にやって来ることでもたらされたものではなく、会員が多様な地域の親族や古老と結びつくことによって取り入れられたものである。これが、同会に伝承される演目の地域的由来と、会員たちの出身地／出自の間に見られる不一致の意味することである。言い換えるならば、「保存会」における演目の地域的由来の多様性は、同会会員の出身地／出自に見られる地域的多様性とある意味で深く関わるが、厳密な意味では両者の地域的多様性は別個のものとして捉えられなければならない。このように、「保存会」は、会員の出身地／出自と演目の由来という二重の意味において、それぞれ異なる多様な地域的特徴を示しているといえるだろう。

## 6. おわりに

本稿では、「保存会」を事例として、アイヌ古式舞踊の伝承を担う主体に着目し、札幌におけるアイヌ人口の構造的変遷を確認したうえで、同会の結成及び発展経緯や会員の出身地／出自を辿りながら、同会が伝承する基本的演目の由来を整理し、札幌在住のアイヌによる歌や踊りの伝承の側面を描くことを試みた。

同会を含め、各地域の保存会は現在、個人や世代により歌や踊りの様式の差異を含みつつも、それぞれ個々の担い手らが集うことによって伝承活動を行っており、これはアイヌの人々が地域単位で集まり、地域を代表する在り方(甲地 1995:80-81、2004:12)の一つとして理解できる。様々な観客に向けて北海道内の市町名を冠する各地域の保存会が披露する演目は、基本的にはその会が冠する市や町を代表し、その地域におけるアイヌ古式舞踊の一翼を担うことになる。その意味で、札幌という地名を冠する「保存会」は、札幌を代表する存在といってよい。

「保存会」は確かに会員の個々人という側面から見れば、それぞれ異なる出身地／出自を持つ会員によって構成されている。だが、札幌を代表する立場にある同会は、個々の会員の出身地／出自にこだわるというより、むしろ札幌という転住先の地を同じくすることを重視する傾向が見られる。それは、会員が同会に伝わる演目をいかに認識し、いかにそれらの演目を習得し、披露するのかという点からも窺われる。概して、多くの会員は、札幌に来て「保存会」に参加してから、同会に伝承されてきた演目を初めて習うのである。とりわけ本稿で取り上げた15の基本的演目の場合、「保存会」の会員の多くは、様々な地域で伝承されつつも人の移動に伴って札幌に伝えられ、札幌に根付いてきたという来歴のある演目を練習して披露するのだとの意識を強く持っており、それを共有しているように見受けられる。

また、第5章第2節で言及したように、同会が伝承する15の基本的演目は、会員自身が同会に伝えたものなのか、会員が非会員から習得したものなのかによって二つの系統に分けられる。この二つの系

統は、「北海道アイヌ古式舞踊連合保存会」の構成団体、つまり同会も含む 17 の保存会という大きな文脈で見れば、より重要な意味を持つと考えられる。確かに 1990 年代、「保存会」が「北海道アイヌ古式舞踊連合保存会」の構成団体として申請した際に、新十津川出身の A 氏から教わった 7 演目を中心に 15 の基本的演目を選択したのは、偶然によるものだったという側面も否定できない。しかし、見方を変えればこれは、各地から寄り集まるようにして札幌に転住した会員が多くを占め、伝承の面で地域独自性を示すことが難しかった札幌の「保存会」が、ほかの地域の保存会と「対等な」地位を獲得するために、当時の会員たちが「札幌でも自らの演目を確立していきたい」という意欲(C 氏、2020.9.16)を強く示した結果であるともいえるだろう。このような動機もあり、札幌を拠点とする「保存会」は、いわゆる札幌以外の出身者から受け継がれた演目のほかに、地域的に最も親和性が高いと思われる石狩川流域に伝わる演目を積極的に継承していくことになった。同会はその一方で、新十津川と旭川出身の伝承者から受け継がれた石狩川流域に由来する演目のみならず、会員の親戚や会員の出身地の古老といった非会員から各地に伝わる演目を教わり、能動的に吸収していった。その結果、同会は、札幌が位置する石狩川流域の地域的な特徴を有しながら、北海道最大の都市としての札幌が持つ多様な地域の出身者が集まりやすいという性格をも体現することになったといえる。

「保存会」は 40 年以上の歴史を有しており、その間に世代交代や退会、入会等によって、常に会員の変動が見られるものの、会員の出身地／出自が多様であるという傾向は一貫して継続している。同会は高度経済成長期以降、札幌に移住してきたアイヌの歌や踊りの様式に見られる個人的、世代的差異を柔軟に包摂し、多様な出身地／出自を持つ伝承の担い手を取り込むことで、石狩川流域を中心とした多様な地域に由来する演目を伝承しようと各種の活動を行っており、このことこそ 1979 年から現在まで続く同会ならではの特徴であるといえよう。

本稿では、主にアイヌの歌や踊りの記録や「保存会」の会員名簿といった既存の資料と、会員からの聞き取り調査に基づき、同会の会員の出身地／出自と演目の地域的由来の関係性について考察した。ただ、これらの演目を具体的に披露する場において、同会がどのような観客に向けて、何をどのように伝えるようとしているのかについては分析する余裕がなかった。この問題は近いうちに別稿で取り上げる予定である。また、北海道以外の都市部におけるアイヌ文化の伝承活動、例えば関東地域での団体に伝承される演目がどのように会員の出身地／出自と関わっているのか(もしくは関わっていないのか)を考察し、札幌の事例と比較するというのも、今後の課題として残されている。

## 謝辞

本稿は 2020 年度国立民族学博物館特別共同利用研究員としての研究活動に基づくものです。本稿執筆にあたり、札幌ウポポ保存会をはじめ、多くのアイヌの方々にご協力頂きました。皆様に心より深く感謝申し上げます。また、2 名の査読者の方々からは、本稿に対して貴重なコメントを頂きました。記して謝意を表します。

## 注

- 1 「アイヌ古式舞踊」という呼称が用いられるようになったことは、1950 年代から 1980 年代にかけて、アイヌの歌や踊りなどの芸能が国の重要無形民俗文化財として指定された過程と深く関わると考えられる(東村 2001)。今日、「アイヌ古式舞踊」という呼称は、多様なアイヌの歌や踊りなどの芸能を包摂する緩やかな括りとして機能している(齋藤 2014)。これらのことを踏まえて、本稿では、原則的にアイヌ古式舞踊をアイヌの歌や踊りを指す語として用いるが、特に国の重要無形民俗文化財として指定されるアイヌの歌や踊りを指す場合には、「アイヌ古式舞踊」という語を用いることにする。このほか、より広義的にアイヌの歌や踊りなどの芸能一般について述べる際には「アイヌの歌や踊り」という言葉を使用する。

- 2 阿寒のアイヌ古式舞踊、春採のアイヌ古式舞踊は、1975年に記録作成等の措置を講ずるべき無形の民俗文化財に選ばれた。
- 3 これらの研究は、「救済民族誌 (salvage ethnography)」というような時代的色合いを帯びるものと考えられるが、これらの研究蓄積は本稿の考察にとって欠かすことのできない重要な成果である。
- 4 同書の「はしがきと凡例」(頁数なし)によると、同書における収録地域は、「千歳市蘭越は鶴川流域、美幌町野崎は釧路地区、門別町庫富は沙流河流域に編入してある」という。収録地区に関する詳細は同書の 545 頁を参照のこと。
- 5 俵木(2018)は、日本の文化財制度から生まれた各種舞踊の保存会は必ずしも踊り手、つまり演者の団体とは限らないと指摘する。これに対してアイヌ古式舞踊の場合、北海道各地の保存会は踊り手が主要な構成員としての役割を果たしている団体である。
- 6 規模(会員数)の面から見ると、「北海道アイヌ古式舞踊連合保存会」は「公益社団法人北海道アイヌ協会」に次ぐ大きな団体組織であるといえ、その事務局は後者の内部に置かれている。
- 7 本稿で使用するデータは主に、2019年3月から2022年9月にかけて合計14ヶ月の間、本稿にとっての主要な調査地である北海道札幌市に住み、研究協力者である「保存会」の会員たちとの信頼関係を保ちつつ、同会の許可や合意を得たうえで、同会の関係者の一員として実施した現地調査で得られたデータの一部である。
- 8 札幌市・人口統計  
(最終閲覧日:2023年1月31日)<https://www.city.sapporo.jp/toukei/jinko/jinko.html>
- 9 北海道・計局統計課・最近の統計指標  
(最終閲覧日:2023年1月31日)<https://www.pref.hokkaido.lg.jp/ss/tuk/>
- 10 世界中の多くの先住民族と同様に、アイヌの人々についても他者の文字による歴史的文献を通してかつての姿を探らざるを得ない側面がある。アイヌ人口調査は、松前藩や江戸幕府、明治以降の日本近代国家の介入と管理に密接に関わる作業である。また、時期によって統計の基準が異なり、特に戦後のアイヌ人口調査は極めて限定的・部分的な統計でしかない。これらの点について十分に意識をしたうえで、これまでのアイヌ人口調査の文献を参照し、札幌におけるアイヌ人口構造に見られる「転住型」という特徴の輪郭を描くことを試みる。
- 11 イシカリ十三場所は、トクヒラ、ハッシャブ、シノロ、ナイホウ、上サッポロ、下サッポロ、上ツイシカリ、下ツイシカリ、上ユウバリ、下ユウバリ、上カバタ、下カバタ、シュママップから構成される。
- 12 ハッシャブ、シノロ、ナイホウ、上サッポロ、下サッポロの五ヶ所が現在の札幌市に相当する。札幌郡は、これに上ツイシカリ、下ツイシカリとシュママップの一部を加えた地域であった。
- 13 本稿では、出身地というのは、基本的に会員が生まれ育った場所を指すが、これまでに会員への聞き取り調査から得た情報によると、札幌に来る以前の幼年期に生まれた場所から別の場所に転住していたという例もある。また、出身地から札幌に移住するまでの間に、一つまたは複数の場所に住んでいた例も少なくない。こうした情報は現代を生きる先住民の文化振興とその文化の移動・変化という視点から見ると極めて重要であるが、現段階では、全ての情報を網羅することができていない。紙幅の制限もあるため、これらに関しては他稿で改めて取り扱うこととする。
- 14 父母または祖父母の世代とはいうものの、特に母親と母方の祖母の方を指す場合が多い。第3章で確認したように、保存会では女性会員が大多数を占めるためである。こうした特徴からは、「保存会」の多くの演目が女性から女性へと伝承されていくという傾向が窺えるだろう。あるいはこれは、女性母方の系統(フチイキリ)を継ぐというアイヌの伝統的な考え方を反映したものであるとの見方もできるかもしれない。なお、10歳未満の男性会員が母親(同会会員)に連れられて同会に参加する場合がよく見られることも付記しておきたい。
- 15 本稿では、和人とはアイヌに対する多数派であるところの日本人を指すという使い方(新井2012)に準じ、和人という表現を適宜使用する。
- 16 「保存会」には、56名の会員以外にも、70代の和人の賛助会員10名ほどが在籍している。以前、「保存会」はアイヌもしくはアイヌと婚姻した者、またはアイヌの養子となった者しか参加できなかった。しかし、2015年頃からは、和人が賛助会員として同会に参加できるようになった。賛助会員は基本的に練習会に参加するのみで、公演には出演しない。
- 17 正式名称は「アイヌ文化の振興並びにアイヌの伝統等に関する知識の普及及び啓発に関する法律」である。
- 18 本稿では、保存会に伝承される演目名称のアイヌ語のカタカナ表記について、主に『アイヌ古式舞踊調査報告書(III)』の「札幌地区伝承演目」や同会の公式小冊子等に記載されている同会が正式に公表している表記に従うものとする。
- 19 「保存会」が伝承する15演目は、同会の公式小冊子によって「リムセ」と「ウポポ」という2種類に分けられている。それによれば、①から⑦は「リムセ」、⑧から⑮は「ウポポ」である。

- 20 「保存会」に伝承される⑤ヤイサマネナ 1と⑦ヤイサマネナ 2は、踊り方や歌詞、旋律等が異なる。踊り方と歌詞に関する詳細は北海道教育委員会(1993)を、旋律に関する詳細は甲地(1995)を参照されたい。
- 21 yaysamanena, yaysama, yaysamaneといったような「叙情歌」は概して「個人の持ち歌」的な性格を強く持つ。そのため、単純にこれらの歌が聞かれる地域だけに着目して、一つまたは複数の地域に伝承されてきた曲であるというように断定できないという面に留意しなければならない。
- 22 なぜ1960年当時、札幌が調査地として設定されなかったのかについて考える時、当時の「調査地」の考え方や「アイヌ文化・アイヌ芸能」に対する考え方そのものに時代的な限界があったといわざるを得ない。今日的視点からすれば、そのような時代的な限界はアイヌやアイヌ文化といったものを固定不変のものとして捉えるようなステレオタイプを生み出すことにつながったといえるだろう。

## 引用文献

新井かおり

- 2012 「アイヌの集落が自らの歴史を語り始めること—貝澤正が編集する地域史『二風谷』の到達」『応用社会学研究』54: 219-236.

石井清治

- 1982 「伊澤コヤエ嬢功績調書」小川早苗(編)『北方群—アイヌ解放運動誌』4:19-38.

石原真衣

- 2017 『『サイレント・アイヌ』を描く—〈沈黙〉を照らすオートエスノグラフィーの可能性』『北海道民族学』14:1-16.

井筒勝信(編)

- 2003 『アイヌ旭川方言辞典草案』北海道教育大学教育学部旭川校、旭川.

岩佐奈々子

- 2018 「アイヌの人々の『新しい生き方』の語り—自己の二重性を乗り越える経験から」『日本オーラル・ヒストリー研究』14:151-172.

岩澤孝子、百瀬響、坂本恵衣

- 2019 「アイヌ古式舞踊の記録と伝承—鶴川アイヌを事例として」『舞踊学』42:1-11.

上村英明

- 2001 『先住民族の「近代史」—植民地主義を超えるために』平凡社、東京.

小熊英二

- 1998 『<日本人>の境界—沖縄・アイヌ・台湾・朝鮮：植民地支配から復帰運動まで』新曜社、東京.

小内透

- 2012 「序章 調査の概要と分析の視点」小内透(編著)『現代アイヌの生活の歩みと意識の変容—2009 北海道アイヌ民族生活実態調査報告書』北海道大学アイヌ・先住民研究センター、札幌、p.9-17.

加藤好男

- 1991 『石狩アイヌ史資料集』加藤好男、札幌.

萱野茂

- 2002 『萱野茂のアイヌ語辞典』三省堂、東京.

木戸調

- 2020 「アイヌ・ネットワークによる文化伝承—アイヌ文化保存会への調査を通して」『北海道大学大学院教育学研究院紀要』136:147-162.

甲地利恵

- 1995 「アイヌ古式舞踊伝承団体のレパトリーにおける歌をめぐる—一国の重要無形民俗文化財の指定を受けた9団体の歌の記録追補」『北海道立アイヌ民族研究センター研究紀要』1: 79-122.
- 2004 『『アイヌ古式舞踊』伝承の現在』『月刊文化財』493: 12-15.

河野本道

- 2000 「アイヌ系住民の都市における動向—北海道内二大都市における場合の輻合・拡散現象」『国立民族学博物館研究報告』25(1): 113-144.

齋藤玲子

- 2014 『『アイヌ古式舞踊』の多様なかたち』『月刊みんぱく』38(11):14-15.

- 札幌ウポポ保存会  
 不明 『札幌ウポポ保存会—重要無形民俗文化財／アイヌ古式舞踊』札幌ウポポ保存会、札幌。  
 札幌市教育委員会（編）  
 2002 『新札幌市史 第5巻・通史5（上）』北海道新聞社、札幌。  
 社団法人北海道ウタリ協会札幌支部（編）  
 2003 『社団法人北海道ウタリ協会札幌支部30周年記念誌』社団法人北海道ウタリ協会札幌支部、札幌。
- 新藤慶  
 2018 「第1章 地域におけるアイヌの歴史と自治体のアイヌ政策」小内透（編）『現代アイヌの生活と地域住民—札幌・むかわ町・新ひだか町・伊達町・白糠町を対象にして』東信堂、東京、26-48。
- 谷本晃久  
 2018 「近代初頭における札幌本府膝下のアイヌ集落をめぐって—「琴似又市所有地」の地理的布置再考」『北方人文研究』11:95-109。
- 多原香里  
 2006 『先住民族アイヌ』にんげん出版、東京。
- 田村すず子  
 1996 『アイヌ語沙流方言辞典』草風館、東京。
- 知里真志保  
 1955 『アイヌ文学』元々社、東京。
- 中川裕  
 1995 『アイヌ語千歳方言辞典』草風館、東京。  
 2009 「アイヌの歌謡」『國學院雑誌』110(11): 320-333。
- 日本放送協会（編）  
 1965 『アイヌ伝統音楽』日本放送出版協会、東京。
- 日本民俗舞踊研究会（編）  
 1987 『北海道アイヌ古式舞踊』日本民俗舞踊研究会、東京。
- 服部四郎（編）  
 1964 『アイヌ語方言辞典』岩波書店、東京。
- 東村岳史  
 2001 「『文化財』としての『アイヌ古式舞踊』」『解放社会学研究』15: 98-118。
- 俵木悟  
 2018 『文化財／文化遺産としての民俗芸能：無形文化遺産時代の研究と保護』勉誠出版、東京。
- 平山裕人  
 2013 『アイヌ語古語辞典』明石書店、東京。  
 2016 『アイヌ地域史資料集』明石書店、東京。
- 平凡社地方資料センター（編）  
 2003 『北海道の地名』平凡社、東京。
- 北海道教育委員会（編）  
 1993 『アイヌ古式舞踊調査報告書（Ⅲ）—三石・弟子屈・札幌・常呂』北海道教育委員会、札幌。
- 北海道教育庁生涯学習部文化課（編）  
 1991 『アイヌ古式舞踊調査報告書（Ⅰ）—白糠・新冠・鶴川』北海道文化財保護協会、札幌。  
 1992 『アイヌ古式舞踊調査報告書（Ⅱ）—様似・門別・千歳』北海道文化財保護協会、札幌。
- 山田秀三  
 2000 『北海道の地名』草風館、東京。

（ご・しょうはい／関西学院大学社会学研究科大学院研究員）